

吉原雀

長唄

全詞章

作詞者・作曲者・初演年不詳

本名題「教草吉原雀」（おしえぐさよしわらずずめ）

資料の題名『教草吉原雀』

凡そ生るを放すこと、人王四十四代の帝、くわうせう天皇の御宇かとよ、養老四年の末の秋、宇佐八幡の託宣にて、諸国に始まる放生会

〔本調子〕浮寝の鳥にあらねども、今も恋しき一人住、小夜の枕に片思ひ、可愛心と汲みもせで、何ぢや何やら憎らしい

〔鼓歌〕其の手で深みへ浜千鳥、通ひ馴れたる土手八丁、口八丁に乗せられて、沖の鳴の二挺立て三挺立て

素見ぞめきは椋鳥の、群れつつ啄木鳥格子先、叩く水鶏の口まめ鳥に、孔雀ぞめきて目白押し、店清搔のてんでつとんさつき押せ押せ

馴れし廓の袖の香に、見ぬやうで見るやうで、客は扇の垣根より、初心可愛く前渡り

サアきた又来た障りぢやないか、又おさはりかお腰の物も、合点かそれ編笠も其処に置き二階座敷は右か左か、奥座敷で御座りやす、早盃持て来たとこへ

静かにお出でなさんしたかと云ふ声に、ぞつとしたしんぞ貴様は寝ても覚めても忘れられぬ、笑止氣の毒またかけさんす何かけるもんだへ

〔三下り〕さうした黄菊と白菊の、同じ勤の其の中に、外の客衆は捨小舟、流れもあへぬ紅葉ぼの、目立つ芙蓉の分へだて

ただ撫子と神かけて、いつか廓を離れて紫苑、さうした心の鬼百合と、思へば思ふと氣も石竹になるわいなア

末は姫百合男めし、其の楽しみも薄紅葉、さりととはつれない胴慾と、垣根にまとふ朝顔の離れ難なき風情なり

〔調〕東雲かことが過し口説の仲直り
ひとたきくゆる仲人の、其のつきききかう縁のはし、そつちの性が憎い故、隣座敷の三味線に、逢へば悪酒落まきなごと

〔二上り〕女郎の誠と玉子の四角、あれば晦日に月も出る、しよんがいな
玉子のよほほいいいいよほほいいいい、よほほいほ、玉子の四角あれば晦日に月が出る、

しよんがいな、ひとたきはお客かへ
君の寝姿窓から見れば、牡丹芍薬百合の花、しよんがいな

芍薬よほほいいいいよほほいいいい、よほほいほ、芍薬牡丹牡丹芍薬百合の花、しよんがいな、つけ差しはこつちやかへエ、

腹が立つやら憎いやら、どうしやうかうしやう憎む鶏鐘暁の明星が、西へちろり東へちろり、ちろりちろりする時には

内の首尾は不首尾と成つて、親父は十面嬋は五面、十面五面に白眼みつけられ
いなうよ戻らうと云ふては小腰に取付いて、ならぬぞいなしやせぬ、此頃のしなし振り、

憎つくいおさんがあるわいな
文のたよりにナア今宵ごんすと其の噂、いつのもんびも主さんの、野暮な事ぢやが比翼紋、離れぬ

仲ぢやとしよんがへ、そまる縁の面白や
実に花ならば初桜、月ならば十三夜、いづれ劣らぬ粋同士の、あなたへいひぬけこなたのだて、いづれ

丸かれ候かしく